台大日本語文研究第 16 期
2008 年 12 月，頁 109-138
2008-09-08 收稿，2008-12-15 通過刊登

中日「同形」漢字詞素「～風」之語意
—透過認知語意學之對照分析—

林慧君*

摘要

本論文透過認知語意學的觀點探討中日兩語造詞能力甚強之「同形」漢字詞素「～風」，其做爲複合詞後項詞素之異同。

首先藉由 schema 理論分析抽出中日兩語「～風」具有相同之 schema〈空氣的流動〉，爾後再抽出最上位 schema〈流動〉。並對於「～風」的多義用法之衍生結構做有系統的論述。

藉由考察分析，了解到：中日「同形」漢字詞素「～風」，以 prototype（典型）爲中心具有相同語意用法之外，從 prototype 向兩邊外圍的語意擴張上呈現出差異.而此差異之產生，是由於漢字詞素「～風」的 prototype 事例「kaze」包含兩個語意屬性〈流動而擴散〉以及〈流動而充滿〉，其所形成之因果性的鄰接關係,在中日兩國語言上呈現差異所致。而此一差異也反映出中日「同形」漢字詞素「～風」所擴張之接尾語詞用法的不同。

此外，亦觀察到從「～風」其基本語意「kaze」含有之〈快速〉的語意屬性所發展出的隱喻(metaphor)表現，在中日兩國語言上亦有所差異。

關鍵詞：風之語意用法、漢字詞素、造詞、認知語意學

* 台灣大學日本語文學系副教授

The Meaning of Same-pattern *Kango* Morpheme「*~FU*」 in Sino-Japanese Languages
―The Contrastive Analysis by Cognitive Semantics―

Lin, Hui-jun*

Abstract

Through the viewpoint of cognitive semantics, the dissertation discusses the differences of meanings and usages when the same-pattern *Kango* morpheme "*~FU*,"which is powerful in formatting words in Chinese and Japanese, plays as the rear morpheme of compound words.

First of all, via the theoretical analysis of schema, we analyze that the words "*~FU*" in Chinese and Japanese with the same schema〈Fluidity of Air〉. Then, we draw out the highest schema〈Fluidity〉.

From investigation and analysis, we can understand: in Chinese and Japanese, the same-pattern *Kango* morpheme "*~FU*" has alike meanings and usages centered on the prototype. In addition, it displays different usages on the semantic extension from the prototype to the periphery. Moreover, the prototype case "kaza" of *Kango* morpheme "*~FU*" contains two semantic attributes: "fluid and diffuse" and "fluid and full."The discrepancy arises because of the contiguity of cause and effect of these two semantic attributes are different in Sino-Japanese languages, and these differences also show the dissimilar usages of the suffix expanded by the same-pattern *Kango* morpheme "*~FU*."

Key words: the meaning of "*~FU*", *Kanji* morpheme, word-formation, cognitive semantics

* Associate Professor of the Department of Language and Literature, National Taiwan University

日本語・中国語の同形字音形態素「～風」の意味
－認知意味論による対照分析－

林慧君*

要旨

本稿は日・中両国語の、造語力の強い同形字音形態素「～風」を取り上げ、両者における合成語の後項要素としての異同について、認知意味論の観点からのアプローチを通して考察したものである。

まず、スキーマ理論からの分析を通して、両国語の「～風」では同じスキーマ〈空気の流れ〉、更に最上位スキーマ〈流れ〉を抽出できた。そして、多義用法間の派生メカニズムを体系的に論述した。

分析により、日・中同形の「～風」はプロトタイプを中心に同様の意味用法を有する一方、プロトタイプから両側の周辺への意味拡張においては相違なる様相が見られた。その相違は、「～風」のプロトタイプ事例「かぜ」に含まれる、〈流れて広まる〉及び〈流れて充満する〉という二つの意味属性に基づく因果的な隣接性が、日本語と中国語では異なる働き方を見せていることに由来する、と明らかになった。そして、この相違は両国語の「～風」の接尾辞的用法への拡張の違いにも反映されていることも分かった。

他に、「かぜ」の有する〈速い〉スピードという意味属性に基づくメタファー表現においても日･中両国語における違いが見受けられた。

キーワード：風の意味・用法、字音形態素、造語、認知意味論

* 台湾大学日本語文学系副教授

日本語・中国語の同形字音形態素「～風」の意味用法
― 認知意味論による対照分析 ―

林慧君

一、はじめに

日本語・中国語（以下、日・中両語とする）において、「友人」、「熱心」などのような同形の二字漢語が数多く存することは周知の事であるが、他に「～化」「～的」などのような、造語力の強い日・中両語の同形一字漢字も少なくない。本稿は、日・中両語における同形一字漢語の一つである「～風」を取り上げ、その意味用法を考察することを目的とする。

日・中両語には、形態素「～風」をその成分に持つ、「寒風」「学風」「中風」などのような同形同義熟語が多く用いられている。その一方、日本語の「警官風（のガードマン）」「列車風（の建物）」のような用法が中国語にはなく、中国語の“漲價風”（値上げばかりする風潮）“麥克風”（マイク）といった意味用法は日本語にはないことも見受けられる[1]。このように、「～風」という形態素は、日・中両語ともに語の後項要素として高い生産性を有しているが、意味用法には同じものも、相違なるものもある。本稿は、日・中両語における、同形形態素「～風」の意味用法や造語現象の異同について、認知意味論のアプローチを通して検討しようとするものである。

一般的に、漢語形態素は、語の構成要素単位としてみた場合、語基か接辞かの区別が難しく、あいまいな場合も多い[2]。その究明も一つの課題ではあるが、本稿は、「～風」の語基か接辞かの認定ではなく、日・中両語における「～風」の意味用法、造語現象の解明を目的とするのである。従って、本稿では山下（1998）に従い、「語基か接

[1] 荒川（1986）90 頁を参照。
[2] 例えば「無～」は、二字漢語の場合、「無線」「無害」などのように語基的であるが、三字漢語では「無気力」「無関心」などのように接辞的だと言われる。（宮地（1977））

辞か」と区別せずに、いわゆる「漢語系接辞」「接辞性字音語基」「字音語基」などと呼ばれるものを「字音形態素」と一括して称することにする。なお、混同を避けるべく、日・中両語同形と日本語独自の語例を「 」で、中国語独自の語例を“ ”で囲み、区別する[3]。

二、先行研究、研究範囲と研究方法

字音形態素「～的」や「～性」などに関する先行研究は少なくないが、「～風」に関する考察はそれほど多くなく、管見によれば、主なものに、荒川（1986）と山下（1998）が挙げられる。

荒川（1986）は、日・中両語における三つの字音形態素「～性」「～式」「～風」について、その意味用法の異同を対照分析したものである。日・中両語における同形接尾辞の対照研究として示唆するところ大である。しかし、「～風」に関しては、日・中両語それぞれの意味分析があまり厳密ではなく、その故、用例の分類にも疑問が残る。例えば、中国語には“把風”(見張る)“聞風”(消息または噂などを聞く)などは、荒川の分類では、どれにも当て嵌まらないのである。また、日本語の「古風」「和風」などの「～風」は、中国語なら“風味”“式”などで表すしかないと述べられているが、調べてみると、

“中國風的藍染服飾”(中国風の藍染服)

“充滿陶藝風的藝術民宿”(陶芸風の芸術的民宿)

などの例が見付かった。というわけで、日・中両語の字音形態素「～風」の意味用法に関しては、もう一度厳密に分析しなおした上で、両者の対照比較を行う必要があるように思われる。

なお、山下（1998）は、「今風」「サラリーマン風」のような、いわゆる接尾辞的用法と見られる「～風」だけを分析の対象とした考察であるが、研究の対象範囲や主旨が本稿と大幅に違う。本稿では、山下の用法例のみならず、字音形態素「～風」を後項要素にもつ複合語、例えば、「疾風」や「画風」といった例をも研究対象とする。要するに、本稿で扱う「～風」の合成語には、「～風」という字音形態素が語の

[3] 中国語の漢字は原則的に繁体字で表記することにした。

構成要素として語基的、そして接辞的に機能すると見られるものが含まれる。

本稿は、日・中両語における字音形態素「～風」の意味用法を網羅的に整理した上で、その用法を比較し、その異同を究明しようとするものである。本来なら複合語の前項要素としての「風～」も分析の視野に入れる必要があろうが、紙幅の制限のため、本稿では合成語後項要素としての「～風」を中心に考察することを断っておく。

ところで、字音形態素「～風」は様々な意味用法をもつ多義語であるが、多義語の意味構造、意味関係などを明らかにするには、認知意味論の観点からのアプローチが有効的だと考えられている。本稿では、まず日・中両語における「～風」の意味用法を、それぞれの辞書や語彙集[4]などに基づいてまとめ、認知意味論のカテゴリー化の理論などを取り入れて分類する。その後、「～風」における多義間の意味展開やその関連性などについて日・中両語を対照しつつ分析し、そして、その多義構造と造語との関わりにおける異同を明らかにしようと思う[5]。

なお、生産性の高い、いわゆる接尾辞的な用法、例えば、日本語の「商人風」や「教会風」、そして中国語の“吃喝風”“漲價風”の用法の語例は、辞書類にはあまり登録されていないため、電子資料[6]などからも収集することにした。また、中国語の語例の場合、基本的には「～風」が熟語の後項に位置する二字と三字漢語だけを研究対象とするが、接尾辞的用法の場合だけはその前接語基について特には限定し

[4] 日本語の辞書や語彙集は『日本国語大辞典』（小学館）、『日本語逆引き辞典』（大修館書店）、『現代新聞の漢字』（国立国語研究所）、『日本語語彙大系』（岩波書店）を使用した。中国語の辞書は『漢語大辭典』（臺灣東華數局）、『辭海』（最新增訂本、台灣中華書局）、『增修辭源』（台灣商務印書館）、『現代漢語搭配詞典』（漢語大詞典出版社）、『教育部重編國語辭典修訂本』（インターネット版）を用いた。

[5] 日本語と中国語の対照研究において、認知言語学の意味拡張モデル理論が有効な方法であることを示した論考は、于康（2007）などが挙げられる。

[6] 中国語の電子資料は「中時新聞資料庫」2007 年 8 月と 9 月分、日本語のは主に「2001 年朝日新聞記事データベース」1 月分と 2 月分を使うが、「CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊」の中の語例を参照にすることもある。

ない[7]。他に、荒川の言う、“麥克風”（microphone）“薩克斯風”（saxophone）などの音訳語としての「～風」も、研究の対象外とする。

三、「～風」の意味用法記述

ここで、まず、日・中両語における同形字音形態素「～風」の、複合語の後項要素としての意味用法をまとめなおす。日・中両語のそれぞれの辞書[8]などの記述に基づいて、 次のようにまとめられるかと思う。まずは、非接尾辞的なもの、つまり語基的な要素としての意味用法である①～⑥と、接尾辞的な意味用法の⑦とに分けて考えることができる[9]。

① 「かぜ」（wind）の意。

日本語例：「寒風」など。

中国語例：“焚風”（フェーン）など。

② ならわし・風習。

日本語例：「悪風」など。

中国語例：“歪風”（歪んだ風習）など。

③ 様式・流儀。

日本語例：「師風」など。

中国語例：“文風”（文書スタイル）など。

④ 人柄のあらわれ。

日本語例：「高風」など。

中国語例：“雄風”（威風堂々たる風貌）など。

⑤ 病気の名。

---

[7] 他に、「～風」を最後の成分にもつ四字成句、例えば“両袖清風”“弱不禁風”などは、原則として今度の調査範囲外とする。

[8] 注 **4** を参照。

[9] 「一、はじめに」にも示したように、漢語形態素を語基と見るか接辞と見るかの判断は、あいまいで難しい場合が多い。なお、本稿の主旨は「～風」が語基なのか、接辞なのかの判定にあるわけでもない。故に、ここでは便宜上、「～風」の前に結合する要素成分選択の制約がかなり緩く辞書にも登録されていない例、または、辞書に接辞的用法のものとして登録されている例を⑦と認定し、辞書に登録されている、熟語的な「～風」の合成語①～⑥の例と大別して考える。

日本語例：「中風」など。

中国語例：“驚風”（子どものひきつけ）など。

⑥「風潮」の意。

日本語例：「新風」など。

⑥’情報・消息の意。

中国語例：“聞風”（消息または噂を聞く）など。

⑦ 接尾辞的用法。

日本語例：「サラリーマン風」など。

中国語例：“騙風”（騙す風潮）、“時尚風”（当世風）など。

以上の「～風」の意味用法のうち、①～⑤は日・中両語で共有する、概ね同じ意味用法であり、⑥以下は日・中両語が異なる様相を見せている意味用法である。以下、日・中両語共通の類似用法、中国語特有の用法、そして接尾辞的用法に分けて検討する[10]。

三．一　日・中両語共通の類似用法

一概に日・中両語共通とは言っても、①②は日・中両語ともに生産的であるのに対し、③④⑤は日・中両語に多少の差が見受けられるなど、生産性などの様相は若干複雑である。

①「かぜ」（wind）の意

「ふう」という字音形態素に当たる漢字が「風」であるということでもわかるように、「かぜ」というのは、字音形態素「～風」の最も典型的な意味用法であり、この用法による造語も、日・中両語ともに最も盛んである。

まず、日・中両語における同形同義の複合語には、次のような例などが挙げられる。

---

[10] 上記した七種の意味用法以外に、「味わい。けしき」（「風致」、「風情」など）、「あてこする」（「風刺」など）、「うわさ」（「風説」など）などの意味用法も挙げられるが、これらは、字音形態素「風」が複合語の後項ではなく、前項に位置する語例の意味用法なので、本稿では前述の通り、このような、複合語の前項に位置する「風」の用法はとりあえず考察の対象外にしておく。中国語の場合も同じ。

「清風」「金風」「突風」「暴風」「強風」「疾風」「陣風」

「貿易風」「海風」「東風」「冷風」「涼風」「颶風」…

これらは大方、「かぜ」の発生地や発生時期、方向、または「かぜ」の強さなどを表す語基との結合による複合語である。

もちろん、日本語や中国語の一方でしか用いられていない「～風」（「かぜ」の意）の造語例も多く見られる。日本語のみの、

「緑風」「黒風」「爆風」「突風」「颶風」

などや、中国語にしか見られない、

”晩風” “斜風” “焚風” “曉風” “龍捲風”…

などが、それである。[11]

ところで、多義語である「～風」の諸意味用法間の関係は、認知意味論的なアプローチから究明することができると思われる。それに当たり、まずは、この①の「かぜ」という、「～風」の典型的な意味を確認しておく必要があろう。いま、日本語側の『大辞林』（第二版）を見てみると、「かぜ」についての意味解釈が、

「空気の動き。一般に、気圧の高い方から低い方に向かう水平方向の空気の流れをいう」

と述べられている。この意味解釈から、「かぜ」の基本義を〈空気の〉〈流れ〉と認定することができるが、以下に見る、②以後の意味用法も、この基本義から何らかの意味拡張を経て成立したと分析できると思われる。

なお、中国語には、この「かぜ」という基本義からの、

“飆風” “來去如風”…

などの、「～風」という構成による、比喩表現としての熟語表現も存在している。これらはいずれも、「かぜ」のように「速く」または「急に」という、「かぜ」の有するスピードの〈速さ〉という意味属性に基づ

[11] 本稿で言う「日本語のみ～」、「中国語にだけ～」、「日中同形同義～」の「～風」の合成語は、その語の出自について言っているのではなく、その語が現代日本語と中国語の語彙として使用されているかどうか、ということを基準にして判断するものである。確かに歴史的に考えると、日中両語間の語彙交渉などの問題もあると思われるが、それは今後突き詰めていきたい。

いた連想、言わば、メタファー[12]表現と考えられる。

この①「かぜ」という基本義は、後述の他意味用法の「～風」と比べると、まずはより具象的だという点、そして「～風」からいちばん想起されやすい点、更にこの基本義に基づく日・中両語共通の造語例が最も多い点などからして、多義用法を有する字音形態素「～風」のプロトタイプ[13]であると言うことが出来よう。

② ならわし・風習

「～風」には、「ならわし・風習」といった意味を表す用法がある。この意味用法で用いられる「～風」には、

「国風」「学風」「党風」「家風」「民風」「古風」「遺風」

など、日・中両語の同形同義語が多く挙げられる。

また、中国語には無い、日本語のみの

「京風」「唐風」「社風」「美風」「良風」「気風」「今風」...

などの造語も少なくないが、反対に、中国語にだけ見られる語例も、次のようなものが見られる。

“歪風”（歪んだ風習）“頽風”（廃頽した風俗気風）

“世風”（世間の気風）“成風”（風格をなす） ...

ここで、認知意味論的に考えると、「風習・ならわし」というのを、〈生活様子や雰囲気などの〉〈流れ〉と解釈することができる。上述した、「～風」の典型的な意味を成す①「かぜ」の〈空気の〉〈流れ〉という基本義から考えると、〈生活様子や雰囲気〉というのは、〈空気〉と概念上の類似性に基づく、拡張された一種のメタファー表現として把握することが出来る。〈空気〉から、更に（「社風」「家風」などの）空間、または（「古風」「今風」などの）時間の用法への意味拡張と言えよう。

③ 様式・流儀

[12] メタファーとは、「ある事柄を、それとよく似た別の事柄を用いて表現すること」であり、「類似性（similarity）に基づいた連想を言語化する認知」ということである。（吉村 2004：第 11 章）

[13] プロトタイプとは、カテゴリーの中の代表的な事例のことで、分かりやすい例でもある。（吉村（2004）30 頁）

「様式・流儀」という意を表す「～風」の造語は、日本語のほうが中国語より盛んであり、実例も圧倒的に多い。

「歌風」「芸風」「詠風」「詩風」「誹風」「談林風」

「都会風」「洋風」「和風」「欧風」…

などが、中国語には無く、日本語だけに見られる例である。

一方、中国語のほうでは、この意味の「～風」の造語は、あまり生産性がないと思われる。今回の調査で見つかったのは、中国語だけの例が、

“文風”（文書の気風）

と一例しかなかった。また、日・中両語の同形同義語も少なく、

「作風」「画風」「学風」「棋風」「曲風」

の五例を数えるのみである。

一方、上記の語例からもわかるように、「様式・流儀」という意を表す「～風」の前に来る語基は、日・中両語ともに芸術の分野や流派といった語が多い。更に、日本語の場合は、他に地域などを表す成分の名詞語基にもつき、その地域の様式やスタイルといった意を表すこともある[14]。

この「様式・流儀」を表す意味は、前述の②「ならわし・風習」のもつ〈生活様子や雰囲気などの〉〈流れ〉という認知的意味が、更に技芸や芸能などに範囲限定され、抽象化された拡張用法と思われる。この③における認知的意味は、ある技芸の〈様式の〉〈流れ〉[15]と解釈できると思われるが、この技芸の〈様式〉も、「～風」の基本義である①「かぜ」の〈空気〉という意味属性と概念上の類似性に基づき、生じた一種のメタファー表現であろう。つまり、①の〈空気の〉〈流れ〉から、②の時間または空間へと、そして②より更に限定された

[14] この③「様式・流儀」という用法のうち、例えば「和風」「京風」などのように「～風」の前に地域を表す語基が結び付く造語は、本来の中国語にはなかったものだが、現在では中国語としても、日本語から借用されたものが語形も意味もそのまま用いられている。

[15] ここの「流れ」とは、『大辞林』にある「流派の系統」という意味である。即ち、「流儀・流派」というのは、古くから「流れて」受け伝えられてきたものであり、「流れる」自身のメトニミーによる意味拡張の結果と解釈することが出来よう。

抽象的な範囲の③へと拡張されたと考えられよう。

④ 人柄のあらわれ

次に、人間と関わる、「人柄のあらわれ」という意を表す「～風」を見てみよう。この意味用法は日本語ではあまり生産的ではなく、今回の調査では、日本語独自の語例は一例も見当たらなかった。また、日・中両語の同形同義の場合も、次の

「威風」「高風」「懐風」

の三例を見るのみであった。

それに対し、中国語だけの造語例は、例えば、

”雄風” “長者風” “教員風” “大將之風”

など、多数見られる。なお、これらの例は、日・中両語ともに、プラス的な意味合いを持つものとして用いられているのも、一つの特徴である。

さて、この「～風」の、「人柄のあらわれ」という意味は、言わば、人間の外見上現われている（〈流れている〉）〈様子、風体、風貌〉についての表現である。認知意味論的な観点から考えれば、この④は、①の〈空気〉からの、人間へのメタファーによる拡張用法であると言えよう。

さて、以上①の基本義から②、③、④への意味拡張は、

〈空気の〉〈流れ〉

↓

〈雰囲気・様式・様子などの〉〈流れ〉

と、共通して捉えられよう。要するに、基本義の意味属性〈空気〉から、空間や社会団体、更に人間における〈雰囲気・様式・様子など〉へと転じた用法はメタファーによる拡張である。もう一つの意味属性の〈流れ〉は、換言すれば、〈流れる〉ことによって〈充満する〉という結果になり、言わば、因果的隣接性によって形成された一種のメトニミー[16]だと考えることができる。要するに、①から②、

[16] メトニミーとは、「ある事柄を、その物の近くにある別の物を用いて表現する」ことであり、「隣接性」において喩えること」である。（吉村 2004：第 11 章）

③、④への転義は、認知意味論で言うメタファー及びメトニミーに基づく、やや複雑な拡張が絡んで生じた意味用法であろう。

⑤病気の名

「～風」が複合語の後項要素に見られる病気の名前は、日・中両語にいくつか存するが、例えば、日・中両語における同形同義の病名は、

「中風」「痛風」「破傷風」「驚風」

がある。ところが、日本語独自の造語は今度の調査では見つからなかった。一方、中国語にしかない病名として

“羊癲風” “鵝掌風” “抽風” “傷風” “腦中風”

などが挙げられる。つまり、病気の名に用いられる「～風」の用法は、中国語のほうが高い生産性を示しているのである。

この、「風」と人間の病気との繋がりに関しては、『日本国語大辞典』にある、「風」の意味解釈、

やまい。風（かぜ）の毒による病気。風病。

という説明からも窺い知ることができる。大自然の気象現象の一つ「かぜ（風）」に起因する病気という考え[17]が、日・中両語ともに古来からあったわけで、病気の名に用いられる「～風」も基本義「かぜ」からの、因果的隣接性に基づく一種のメトニミー表現と認められるのである。

三．二　中国語の特徴的な意味用法

上記⑥「風潮」と⑥’「情報・消息」は、中国語にその特徴が著しく見受けられる用法である。

⑥「風潮」の意

「～風」が「風潮」という意味として合成語の後項要素に位置する用法は、一応日本語にもあることはあるが、かなり少ない。例えば、新聞では次のような例が見つかった。

[17] 漢方医学では、「風（ふう）」を病因または病症の意を表す医学的な概念と考える。（『中国漢方医語辞典』76 頁）

……保険業界に新風を吹き込む、画期的な試みだ。

（朝日新聞 2001.1.12）

昨年は長野や栃木の知事選で無党派旋風が吹きました。

（朝日新聞 2001.1.16）

だが昨年秋から顕著になった景気の落ち込みが逆風になった。（朝日新聞 2001.2.6）

上の「新風」「旋風」「逆風」に見られる「～風」は、「世の中の成り行き」、つまり「風潮」を表している。

なぜ、「～風」にこの「風潮」という意味用法が生じたかについても、認知意味論的な観点から考えればわかりやすい。例えば、「新風」の「～風」は、

〈世の中の現象が〉〈速く〉〈流れて〉〈広まる〉

という認知的意味が考えられるのである。要するに、まず〈世の中の現象〉の〈流れる〉スピードが、「かぜ（風）」の〈速い〉スピードに類似していて、メタファーが働く。そして、その現象が世の中に〈流れる〉ことにより、その結果として世に〈広まる〉わけであるが、この段階では、因果的隣接性に基づくメトニミーが働いていると考えられよう。要するに、「風潮」の「～風」には、「かぜ（風）」のように〈速く〉世に〈広まる〉、つまり「かぜ」の意味属性のメタファーとメトニミーが大いに働いていると見られるのである。

この「風潮」の「～風」の意味用法は、日本語ではまだそれほど生産性がない。一方、中国語では、かなり活発な造語力を有しており、更に進んで接辞化しているとも考えられる。中国語のこの用法に関しては、三．三の「接尾辞的用法」で述べることにする。

⑥’「情報・消息」の意

ここでは、中国語にしかないと思われる、⑥’「情報・消息」の「～風」を見ることにする。

日本語のほうでは、この「情報・消息」としての「～風」が複合語の後項に位置する造語は見当たらない。つまり、あまり派生的ではな

いのである[18]。一方、中国語には、

“走風”（消息をもらす）“漏風”（秘密が漏れる）

“知風”（情報を入手する） “觀風”（動静を探る） …

といった熟語表現が多く見られるが、これらの「～風」は、「消息や情報」などの意を表していると解することができる。

これも、認知意味論からすれば、「消息や情報」などに「かぜ（風）」と〈流れる〉という共通類似性があることから、その類似性が働いている、つまりメタファー表現だと言えよう。更に、〈情報・消息が〉〈流れる〉ことにより〈広まる〉という結果になることからは、上に見たのと同じく、因果的な隣接関係によるメトニミーが働かされるのであろう。要するに、“走風”などに見られる中国語の「～風」からは、

〈情報・消息などが〉〈流れて〉〈広まる〉

といった認知的意味を考えることができるのである。

三．三　接尾辞的用法

前節まででは、複合語の後項に位置する「～風」の意味用法について分析を行ってきた。それらの場合、字音形態素「～風」の前に来る語基が大体限られており、言わば、熟語的な構成であった。

ところが、上述した「～風」の意味用法のうち一部は、更に文法化し、いわゆる接辞化した用法も派生したと思われる。この節では、日・中両語における「～風」の接辞化用法について考察する。

本稿の実例調査から、様々な名詞に後接する接尾辞としての「～風」は、日本語には三つの用法が、中国語には二つの用法がそれぞれ見受けられた。その中には、日・中両語に共通する用法と、それぞれに特有の用法のものがあることも分かった。以下、共通用法と特有用法に分けて考察を進める。

---

[18] 日本語の複合語の前項に「風～」が来る熟語表現には、中国語の⑥’と似ている意味用法をもつ例がなくはない。例えば、「風説」「風評」など。しかし、本稿は複合語の後項要素に位置する「～風」を論じるものなので、専ら前項に位置する、日本語のこの用法は論外にする。

三．三．一　日・中両語共通の接尾辞的用法

日・中両語に共通する、接尾辞としての「～風」の意味は、

「前接語基の様式・スタイルの意を表し、またはその雰囲気・趣がある」

といったものである。例えば、日本語における「日本語風」「日記風」「関東風」「毛皮風」や、中国語における“中國風”“休閒風”などのようなものである。

「接尾辞としての基本義」とでも言えそうな、「前接語基の様式・スタイルの意を表し、またはその雰囲気・趣がある」意味の「～風」は、認知意味論的な観点からすれば、前述した、三．一の日・中両語共通の類似用法の、②「ならわし・風習」、③「様式・流儀」、④「人柄のあらわれ」の三者から共通抽出した、〈雰囲気や様式、様子などの〉〈流れ〉という認知的意味が更に発展して接辞化したものと考えられる。以下、この「接尾辞としての基本義」としての実例を挙げ、日本語と中国語のそれぞれに見られる事柄の二三について言及する。

まずは、日本語における、この意味用法での「～風」の形態的様相であるが、

（1）　[N 風]：

「調理法は関東風と関西風」「イワシのボロネーズ風」

「…悠然と人を無視して静まっている姿は哲人風」

（2）　連用修飾用法

「アメリカ風には育って欲しくない」

「お茶漬け風にあっさりと食べるには、…」

（3）　連体修飾用法

［N 風 N］：

「ペンション風住宅」「本格的な武家風書院造り」

[N 風の N]：

「アジア風の店」「行進曲風のテーマソング」

の三種類が見受けられる。

なお、これらの前接語基を、固有名詞と普通名詞に分けてみると、固有名詞が特に多く見られる。このことは、固有名詞が、そのもの特有の、特徴的な様式・スタイルまたは雰囲気などを表しやすいからだと考えられる。つまり、その特徴的な様式や雰囲気などを引き立てようとする意図があるからだと思われよう。さらに、普通名詞の場合であっても、典型的で顕著な特徴の要素を有する場合だと、「～風」と結び付きやすいこともあるように見られる。例えば、「ロッジ風」「武家風」「毛皮風」「哲人風」「役人風」[19]などである。

一方、中国語における、「前接語基の様式・スタイルの意を表し、またはその雰囲気・趣がある」という意味の「～風」の語例は、

“中國風” “民族風” “東洋風” “休閒風” “民俗風”

“混搭風”（混ぜ合わせた趣） “地中海浪漫風”...

などが見られる。調べた限りでは、中国語のこの用法の場合、「～風」の前の語基にヒト名詞が現れないという点で、日本語とは違う。

ところが、このことと関連して、荒川（1986）では、この「様式やスタイル」といった意味を表す場合は、中国語では“風味”または“式”などにより表すしかない、と述べられている[20]。しかし、今回の実例調査を通して見ると、二字熟語“風味”以外に、一字字音形態素「～風」もこの意味用法をもち、しかもかなり接辞化して、様々な語基と結合する活発な造語力を有していることが明らかである。

三．三．二　日本語特有の接尾辞的用法

ここでは、中国語にはない、日本語特有の接尾辞としての「～風」について、考えてみる。これには、次の二つの用法があるかと思われる。

「比喩的な用法」

「同定推定のあいまい化用法」

---

[19] 「役人風」の「～風」は「かぜ」と訓読みすることもできるが、『広辞苑』によれば、漢字「風」の訓読み「かぜ」にも接尾辞的な用法があり、「そのようなそぶり。様子」という意味である。他に「先輩風（かぜ）」なども挙げられる。

[20] 荒川（1986）90 頁。

上述した、「前接語基の様式・スタイルを表し、またはその雰囲気・趣がある」という意味を表す接尾辞的用法から、更に、「～ように」「～ような」といった比喩的な用法が派生した。例えば、

「想像された火星人風に頭でっかちになるかもしれない」

「悪魔風にメークした彼女たちの受け答えは、...」

などである。

上の二例は、いずれも「～風」の前に来る、その喩える語基名詞(「火星人」「悪魔」) を実際に指しているものではなく、そのような感じのものに喩える用法である。換言すれば、喩えられるものが、「～風」の前に来る語基名詞の持つ特徴をたくさん有しているから、語基名詞に喩えられるようになるのである。これは、上述した、「前接語基の様式・スタイルを表し、またはその雰囲気・趣がある」という用法から、更に進んで拡張した比喩的用法だと考えられよう。

次に、「同定推定のあいまい化用法」であるが、例えば、次のような、特に人物について説明する時によく現れる、「～風」が見られる。

「……二十四日午後六時二十分ごろ、*外国人風の男二人*が入ってきて、レジの店員（二二）に五千円札二枚を手渡した。」（朝日新聞 2001.1.29）

「ホッとしたのもつかの間、*大学生風の青年*が私の前に立ち、缶コーヒーを飲み始めた。」（朝日新聞 2001.1.22）

この「～風」の接尾辞的用法は、形態的に[ヒト名詞＋風の＋ヒト名詞]という構造になっているのが特徴的である。ここで、「～風」の前に来るヒト名詞をヒト名詞１、後に来るのをヒト名詞２としておく。

上に挙げた例文は、「アジア風の店」のような前接語基の様式などの特徴を表す意味や、或いは「悪魔風にメークした彼女たち」のような比喩的用法とは違う意味合いで用いられている。これは、話者がヒト名詞２（「男二人」「青年」）をヒト名詞１（「外国人」「大学生」）と同定の推定を示している一方、その判断を避けようとする、言わ

ば、「あいまい化」[21]の用法だと考えられるのである。本稿でこの用法を「同定推定のあいまい化用法」と称することにする。

現代日本語の特徴の一つとして、断定表現が避けられ、物事があいまいにして表現されることがよくあるが、これは、日本人が人とコミュニケーションを取る際、自分の主張を和らげようとするからである。「～風」の接尾辞的用法にも、ヒト名詞 2 に現れる、ヒト名詞 1 の有する様式、雰囲気などの特徴から同定の推定を行うと同時に、それをあいまい化する用法が生じたわけであろう。

以上、日本語の「～風」の接尾辞的用法として、三つを上げた。まず、前接語基の様式・スタイル、雰囲気などの特徴を引き立てる意味用法（「ペンション風住宅」など）が挙げられる。そして、「～風」の後に来る名詞にその前接語基の有する様式、雰囲気などの特徴をたくさん帯びたことから比喩的用法（「悪魔風にメークした彼女たち」）が生じた。それは、更に、主に人物について、ヒト名詞語基の有する様式、雰囲気などから、同定推定のあいまい化用法（「外国人風の男二人」）が派生したのである。このうちの、比喩的用法及び同定推定のあいまい化用法は、中国語の「～風」には見られない用法である。

三．三．三　中国語特有の接尾辞的用法

次に、中国語の「～風」の接辞化であるが、これには二つの用法がある。その一つは、日・中両語共通の「様式・スタイル、または雰囲気・趣」に当たる用法であり、もう一つは、三．一の日・中両語の共通用法⑥「風潮」という意を表す用法である。

前の三．一の⑥のところにも述べたように、「風潮」という意を表す「～風」は、あまり生産性をもたない日本語に対して、中国語の場合は、かなりの造語力を有しており、接辞化にも拡張・発展している。この点からして、これは日本語には見られない中国語特有の造語現象だと言えよう。

[21] タチアナ（2003）33～34 頁を参照。

その語例として、例えば、

”漲風” “跌風” “騙風” “旋風”…

の二字熟語の例に止まらず、次に挙げる例のように、様々な語基に結び付くことができる。更に、文レベルの語基と結合している例も、今回の新聞用例の調査で見つかった。

“漲價風” “星座風” “合併風” “梵谷風”

“民宿休閒風” “燒烤流行風” “多元混搭度假風”…

「～風」の前に来る語基が漢字一字から文レベルまでかなり幅広く許されているということは、この「風潮」という意を表す中国語の「～風」がすでに接辞化していることを証明している。

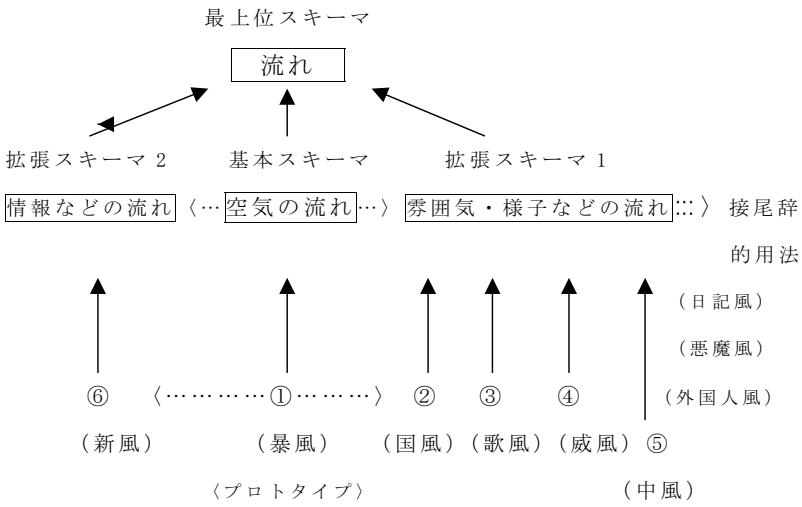
この、接辞化したと見られる「～風」に、どのような認知意味論的なプロセスを経て、「風潮」という意味用法が生じたのかに関しては、すでに三．一の⑥で論じた。中国語も日本語と同様、これらは、〈世の中の成り行き〉を風の〈速い〉スピードにメタファーをかけられ、さらに〈世の中の現象が〉〈流れて〉〈広まる〉という因果的隣接性に基づくメトニミーが働く、という認知的な形成過程を経てできた用法だと考えられる。

四．認知意味論による「～風」の対照分析

この節では、認知意味論的な観点から、前節三で論じた日・中両語における合成語の後項要素としての字音形態素「～風」の意味用法を対照しながら、両者の多義的用法の展開における異同をまとめ、考察しようと思う。

ここでは、認知意味論のプロトタイプ理論とスキーマ理論を用いて、字音形態素「～風」の多義用法における拡張現象をまとめるが、まず、三で述べた日本語の「～風」の用法①～⑥、そして接尾辞的用法の三種も含めて、その意味拡張を図式にすると、図 1 の如くである。それから、中国語の「～風」の意味用法①～⑤及び⑥’、そして二種の接尾辞的用法も含め、その多義的用法間の意味拡張を、図 2 のように図式化することができる。

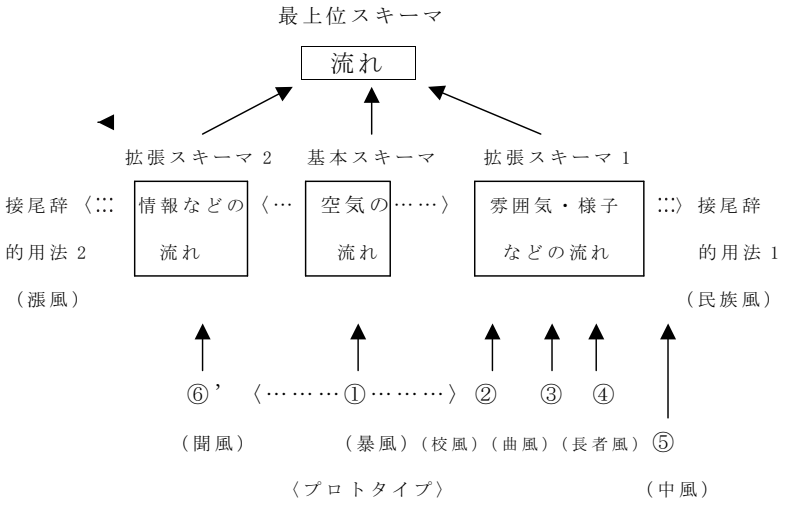
図１　日本語の「～風」の意味拡張



↑ 抽象化　…… 拡張　（ ） 語彙　::::::接辞化

↓ 具体化（図１と図２では省略してある）

図２　中国語の「～風」の意味拡張



上の図を説明する前に、先に「スキーマ」について説明する。「スキーマ」とは、

同じ事物を指す他の表示よりも概略的で詳細を省いた記述がされている意味、音韻、もしくは象徴構造を指す。

こと[22]であり、即ち、

カテゴリーの全成員に共通して想定される抽象的な理想像

ということである[23]。なお、カテゴリーの全成員は、プロトタイプの拡張例とみなされる。

次は、図 1 及び図 2 を通して、日・中両語における意味拡張の類似点と相違点、そして、その意味拡張におけるメカニズムの違いを論じていく。

四．一　日・中両語における意味拡張の類似点

上の図 1 と図 2 からわかるように、日本語の「～風」も中国語の「～風」も、その同義用法①の「かぜ」が他の意味用法に拡張される基本義であり、この基本義を様々な「～風」のプロトタイプとして捉えることができる。このプロトタイプの①「かぜ」から抽象化した〈空気の流れ〉が、スキーマ的意味であり、以下に見るが如く、多くの拡張の起点となる故、これを「基本スキーマ」[24]と捉えることができよう。

日・中両語とも、そのプロトタイプから用法②、③、④という、空間や社会団体、更に人間における〈雰囲気・様式・様子などの〉〈流れ〉へと、右へ意味用法を拡張している。

なお、⑤の「病気の名」を表す「～風」は、前述した通り、基本義「かぜ」からの、因果的隣接性に基づくメトニミー表現であり、即ち、「かぜ」に起因し、人間に現れている（〈流れている〉）病気の〈様子〉の結果が生じる、という意味拡張のプロセスが考えられる故、「病気の名」を表す「～風」も図のプロトタイプから右への拡張として捉えら

[22] 『認知言語学キーワード事典』124 頁を参照。
[23] 吉村（2004）47 頁を参照。
[24] 「基本スキーマ」という用語は、タチアナ（2003）による。

れると考える。

図 1 では、右へ拡張した②、③、④、⑤における、空間や社会団体、または人間における〈雰囲気・様子などの流れ〉という共通して抽象化した認知的意味を、基本スキーマからの拡張スキーマだと捉えることができよう。後で述べるが、字音形態素「～風」の多義的用法はプロトタイプから右へとのみならず、左へも拡張しているので、この右への拡張スキーマを拡張スキーマ 1 としておく。

基本スキーマから具体化したのはプロトタイプであり、図 1 における右側の②、③、④、⑤の下に挙げてあるそれぞれの語彙は、拡張スキーマ 1 を具体化したものとなる。そして、この拡張スキーマ 1 から具体化したそれぞれの語彙は、プロトタイプからの拡張例だと考えることができる。

四．二　日・中両語における意味拡張の相違点

次に、日・中両語における意味拡張の相違を見てみよう。まず、図 1 と図 2 における、プロトタイプから右への拡張の違いに関してであるが、日・中両語は一応両者ともに、この〈雰囲気・様式・様子などの〉〈流れ〉から更に右へと接辞化しているものの、中国語のほうでは、図の右への接辞化の拡張は「前接語基の様式･スタイル、または雰囲気などの意を表す」という接尾辞的用法のみである。一方、日本語のほうでは、「前接語基の様式・スタイル、または雰囲気などの意を表す」用法以外に、比喩的用法、また同定推定のあいまい化用法も生じた、やや複雑な意味変化を示している。

それから、図 1 と図 2 におけるプロトタイプから左への拡張の違いについて説明する。まず、図 1 の日本語のほうでは、「風潮」という意を表す「～風」からは、前述したとおり、

〈世の中の現象が〉〈速く〉〈流れて〉〈広まる〉

という抽象化した意味を抽出できる。これは、プロトタイプの「かぜ」に含まれる〈速い〉スピードという意味属性との類似性の連想を基盤にし、〈空気〉から、更に抽象的な次元〈世の中の現象など〉へと、

比喩的な拡張が働いているものと見られる。そして、〈世の中の現象〉、即ち〈世の中の成り行き〉からは〈世の情報や消息の流れ〉という認知的意味を解釈することができよう。なお、日本語におけるこの用法は、一応プロトタイプから拡張されてはいるものの、造語がかなり限定され、それほど派生的ではないことも見受けられる。

一方、図 2 の中国語のほうでは、「～風」のプロトタイプから左への意味拡張においては、先に、⑥'"聞風"のような「情報・消息」という意味用法が拡張されている。これが、「～風」のプロトタイプから左への意味展開のプロセスにおける、日本語との大きな違いである。そこから更に、「風潮」という意を表す接尾辞的用法も拡張されるが、日本語と違って、かなりの生産性を有していることが分かる。

これらの中国語にしかない、⑥'の「情報・消息」を表す「～風」の意味用法と、「風潮」即ち〈世の中の現象（情報）などの>〈流れ〉という意の接尾辞的用法との間に、〈情報などの流れ〉という共通スキーマを抽出することができる。これを、拡張スキーマ 1 とは別として、基本スキーマ〈空気の流れ〉から左への拡張スキーマ 2 とする。そして、"聞風""漲風"などは、拡張スキーマ 2〈情報などの流れ〉が具体化した拡張例だと捉えることができよう。

なお、「～風」の意味展開において、基本義の「かぜ」に含まれる〈速い〉スピードという意味属性の拡張ぶりも日・中両語において異なりを見せている。

中国語には、"來去如風"などの、「かぜ」のスピードとの類似性に基づく比喩表現もあるし、また「かぜ」の〈速い〉スピードに基づく、メタファー表現の「風潮」という意を表す接尾辞的用法の造語も活発化している。それに対し、日本語のほうは、〈速い〉スピード関連の比喩表現もたいして派生していなく、また「風潮」という意味の造語力もかなり低いことが指摘できる。つまり、「かぜ」に含まれる〈速い〉スピードという意味属性が、中国語のほうではよく生かされているのに対し、日本語の場合はあまり働かないのである。

最後に、[ヒト名詞＋風]という語構造における日・中両語の意味

的な違いを指摘したい。

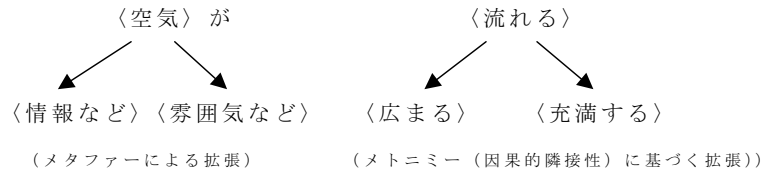
日本語の例として、「商人風」「天才風」のように「～風」は、その前接のヒト名詞語基の雰囲気があることを表す意だったり、「兄貴風の田村亮」のような比喩的な用法、または「外国人風の男二人」のような同定する推定のあいまい化の用法だったりする、言わば、接尾辞的用法なのである。一方、中国語の場合は、“長者風”“教員風”などの例の如く、「～風」は前接のヒト名詞語基の「人柄のあらわれ」という意味用法であり、つまり、プラス的な用法に限定されているのである。

日本語と中国語では同じ[ヒト名詞＋風]という語構造でありながら、異なった意味を示している、ということも本稿の考察を通して明らかにできた。

四．三　拡張スキーマの違いから

さて、ここでは、基本スキーマから左右へと拡張する、拡張スキーマ 2 と拡張スキーマ 1 を比較してみることにしよう。

「～風」の基本義「かぜ」のスキーマ的意味は〈空気の流れ〉(〈空気〉が〈流れる〉)と分析できると前に述べたが、図 1 と図 2 における、基本スキーマから 左右への拡張は、次のように分析できる。



まず、〈空気〉からは、右へは〈雰囲気、様子など〉と、そして左へは〈消息など〉と、概念上の類似性に基づくメタファーの拡張である。

そして、もう一つの共通する意味属性〈流れる〉に関しては、基本スキーマから右の〈雰囲気・様子などの流れ〉への拡張スキーマ

1 を〈雰囲気などが流れて充満する〉と考え、そして、左の〈消息などの流れ〉への拡張スキーマ 2 を〈消息などが流れて広まる〉と分析できる。言わば、基本スキーマ〈流れる〉には、〈流れて広まる〉及び〈流れて充満する〉という二つの属性が含まれている。

この二つの属性には、どんな違いがあるのであろう。〈広まる〉というのは、より動作的であり、「広く伝わる」という運動がポイントと考えられるが、一方、〈充満する〉というのは、「いっぱいになる」という意味の如く、より状態的であり、即ち、全体的に「充分に満ちる」という状態が強調されているのであろう。

この「～風」の意味拡張において、〈情報・うわさなど〉が〈流れる〉ことによって〈広まり〉伝わることと、〈雰囲気など〉が〈流れる〉ことによって全体に〈充満する〉ことの、やや違う結果性が見られる。要するに、最終的には、右への意味拡張は〈充満する〉ところに、そして左へのほうは〈広まる〉ことに力点が置かれている、というメトニミーの内容的な違いが窺われるわけであるが、これを図式にすると、

共通する属性

〈流れて広まる〉〈……〈流れ〉……〉〈流れて充満する〉

になる。この基本スキーマ〈流れ〉からの左右への拡張は、意味上やや異なったところがあるものの、いずれも因果的隣接性に基づくメトニミーの拡張という点では共通している。

そして、基本スキーマと、拡張スキーマ 1 また拡張スキーマ 2 との間には、〈流れ〉という共通する属性が抽出できる。この〈流れ〉を、基本スキーマと拡張スキーマから更に抽象化する最上位スキーマとすることができよう。

上述した図 1 と図 2 を通して、この日・中両語の「～風」の意味拡張と用法は、基本的にはプロトタイプを中心に大体一致しているが、拡張スキーマの違いから、プロトタイプから両側の周辺への意味拡

張のメカニズムにおいて、次のような相違点が見られる。

まず、日本語の「～風」の場合は、左の〈流れて広まる〉という意味属性の拡張スキーマ 2 にも拡張はしたものの、「情報・消息」という意に当たる用法も無く、〈風潮〉としての用法もかなり限られており、生産性が殆ど無い。これからは、意味用法の展開プロセスにおいて、プロトタイプ「かぜ」に含まれている〈流れて広まる〉という意味属性が比較的弱く働くと言えよう。それに対し、主に右の、プロトタイプ「かぜ」にある〈流れて充満する〉という意味属性が強調される拡張スキーマ 1 のほうが活発に働いている。それは、拡張スキーマ 1 から更に拡張し、接尾辞的用法による造語を多く作り上げるわけであろう。しかも、中国語には見られない、比喩的用法と同定推定のあいまい化用法まで派生している多様さも、プロトタイプ「かぜ」から右への拡張が強く機能しているということを示していると言えるのであろう。

一方、中国語の「～風」の場合は、プロトタイプ「かぜ」に含まれている〈流れて広まる〉及び〈流れて充満する〉という二つの意味属性がともに働いており、基本スキーマから拡張スキーマ 1 及び拡張スキーマ 2 へと、バランスよく左右に拡張している。それは更に、両側に接辞化へと広がり、それぞれ接尾辞的用法 1 及び接尾辞的用法 2 を生み出したのである。また、日本語には存在しない、「情報・消息」という意味用法が拡張されていることからは、〈流れて広まる〉という意味属性が、中国語ではより強く働いていることを汲み取ることができよう。

五、おわりに

本稿では、日本語と中国語の同形字音形態素「～風」の意味用法と造語現象との関わりについて考察してきた。

まず、認知意味論のスキーマ理論からアプローチし、両言語の「～風」から、同じスキーマ〈空気の流れ〉、更にその上に最上位スキーマ〈流れ〉を抽出できた。それから、多義用法間の派生メカニズム

を体系的に論述した。

なお、カテゴリー化理論での分析を通して、「～風」が、プロトタイプを中心に日・中両語共通の用法を有する一方、プロトタイプから両側の周辺への意味拡張においては相違なる様相を示していることも明らかにした。

日本語と中国語の「～風」を比べると、その意味拡張のメカニズムにおける違いが見られた。プロトタイプ「かぜ」に含まれる、〈流れて広まる〉という意味属性と〈流れて充満する〉という意味属性の拡張様相が異なるのである。日本語の場合は、主として〈流れて充満する〉という意味属性に基づく因果的隣接性のほうが働いており、〈流れて広まる〉という意味属性は微弱である。即ち、日本語の意味拡張は全体として〈充満する〉（図 1）の右寄りへの拡張なのである。それに対して、中国語はプロトタイプから左右バランスのよい拡張を見せており、〈流れて広まる〉と〈流れて充満する〉という二つの意味属性に基づく因果的隣接性がともに機能する展開を示しているのである。この相違は、両言語の「～風」の接尾辞的用法への拡張の違いにも反映されていることも明らかである。

また、プロトタイプ「かぜ」に含まれる〈速い〉スピードという意味属性に関しても、それに類似するメタファー表現は、中国語では少なくないのに対して、日本語の場合はさほど生産的ではない、ということも分かった。

以上の字音形態素「～風」の考察から、日・中両語の、同形字音形態素の意味用法と造語現象に関する対照分析において、認知意味論の研究方法が有効的であることを再度証明できたかと思う。

参考文献

荒川清秀（1986）「－性　－式　－風」『日本語学』5－3　明治書院

于　　康（2007）「意味拡張モデルと中日両言語の対照研究－中国語の“听”と日本語の「聞く」を手掛かりに－」『日

中対照言語学研究論文集－中国語から見た日本語の特徴・日本語から見た中国語の特徴－』和泉書院
河上誓作（2001）「認知意味論－「サンドイッチ」にみる意味拡張のメカニズム―」『国文学』46－2　学燈社
ケキゼ　タチアナ（2003）「「ぽい」の意味分析」『日本語教育』118
宮地　裕（1977）「現代洋語の構成」『国語国文』46－5
野村雅昭（1978）「接辞性字音語基の性格」『国立国語研究所報告 61 電子計算機による国語研究Ⅸ』国立国語研究所
辻　幸夫（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社
山下喜代（1998）「字音形態素「～風」について」『青山語文』28
吉村公宏（2004）『はじめての認知言語学』研究社

辞書・資料

北原保雄 編（1990）『日本語逆引き辞典』大修館書店
――――――（2003）『岩波日本語 使い方考え方 辞典』岩波書店
国立国語研究所（1976）『現代新聞の漢字』国立国語研究所報告 56
国立国語研究所　編（2004）『分類語彙表　増補改訂版』大日本図書
『日本国語大辞典　第二版』（2002）小学館
諸橋轍次（1996）『大漢和辞典　修訂第二版』大修館書店
NTT コミュニケーション科学研究所　監修（1997）『日本語語彙大系』

岩波書店

成都中医学院等編著　中医学基本用語邦訳委員会　訳編（1980）『中国漢方医語辞典』中国漢方発行
羅竹風 主編（1997）『漢語大辭典』台灣東華書局
梅家駒 主編（1999）『現代漢語搭配辭典』漢語大辭典出版社
台灣商務印書館編審委員會 編纂　（1978）『增修 辭源』台灣商務印書館
台灣中華書局辭海編輯委員會 編輯（1992）『最新增訂本 辭海』台灣

中華書局
『2001 年朝日新聞記事データベース』1 月・2 月
『CD－ROM 版　新潮文庫の 100 冊』（1995）新潮社
『教育部重編國語辭典修訂本』（インターネット版）
『中時新聞資料庫』2007 年 8 月・9 月（インターネット版）